

平成24年度採択プログラム 中間評価調書

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	大阪大学	整理番号	J02
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) ひらの としお 氏名・職名 平野 俊夫 (大阪大学・学長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) かわはら げんた 氏名・職名 河原 源太(大阪大学大学院基礎工学研究科長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) きむら つよし 氏名・職名 木村 剛 (大阪大学大学院基礎工学研究科物質創成専攻教授)		
4. 類型	J<複合領域型(物質)>		
5.	プログラム名称	インタラクティブ物質科学・カデットプログラム	
	英語名称	Interactive Materials Science Cadet Program	
	副題		
6. 授与する博士学位分野・名称	博士(理学)、博士(工学)、または博士(学術) 付記する名称: インタラクティブ物質科学・カデットプログラム		
7. 主要分科	(① 物理学) (② 複合化学) (③ 応用物理学) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	基礎化学、材料化学、材料工学、電気電子工学		
8. 主要細目	(①) (②) (③) ※ オンライン型は太枠に主要な細目を記入		
	物性Ⅰ、物性Ⅱ、合成化学、高分子化学、数理物理・物性基礎、物理化学、原子・分子・量子エレクトロニクス、応用物理学一般、デバイス関連化学		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	基礎工学研究科物質創成専攻、基礎工学研究科システム創成専攻、理学研究科物理学専攻、理学研究科化学専攻、理学研究科高分子科学専攻、工学研究科マテリアル生産科学専攻、工学研究科応用化学専攻、工学研究科精密科学・応用物理学専攻、工学研究科・生命先端工学専攻		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	国立研究開発法人理化学研究所 放射光科学総合研究センター、 国立研究開発法人情報通信研究機構		

(機関名:大阪大学 類型:複合領域(物質) プログラム名称:インタラクティブ物質科学・カデットプログラム)

14. プログラム担当者の構成 計 41 名					
外国人の人数	0	人	[0.0%]	女性の人数	1 人 [2.4%]
プログラム実施大学に属する者の割合 [92.7 %]					
プログラム実施大学に属する者			38 人	プログラム実施大学以外に属する者 3 人	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			31 人	そのうち、大学等以外に属する者 3 人	

15. プログラム担当者

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成26年度における役割)
(プログラム責任者)					
河原 源太	カハラ ゲンタ		大学院基礎工学研究科・研究科長	熱流体工学・博士(工学)	プログラム責任者、全学組織との連携、統括会議議長
(プログラムコーディネーター)					
木村 剛	キムラ ツヨシ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・物性物理学領域・教授	物質科学・固体物理学博士(工学)	プログラムの統括・推進、運営委員長、統括会議メンバー
芦田 昌明	アシダ マサキ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・未来物質領域・教授	光物性物理学博士(理学)	物質科学教育推進、キャリアパス支援、運営委員
伊東 忍	イトウ シノブ		大学院工学研究科・生命先端工学専攻・教授	生物無機化学工学博士	物質科学教育推進、教務・教育システム実践
井上 正志	イノウエ タカシ		大学院理学研究科・高分子科学専攻・教授	高分子物理化学、レオロジー・工学博士	物質科学教育推進、採用・評価、運営委員
今田 勝巳	イマダ カツミ		大学院理学研究科・高分子科学専攻・教授	生物物理学、生体高分子構造・博士(理学)	物質科学教育推進、教務・教育システム実践
井元 信之	イモト ノブキ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・物性物理学領域・教授	量子光学、量子情報、量子力学基礎、工学博士	物質科学教育推進、教務・教育システム実践
馬越 大	ウマゴシ ヒロシ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・化学工学領域・教授	Bio-Inspired 化学工学・博士(工学)	物質科学教育推進、学外・国際連携
奥村 光隆	オクムラ ミツタカ		大学院理学研究科・化学専攻・教授	量子化学、触媒化学・博士(理学)	物質科学教育推進、広報・リクルート、運営委員
北岡 良雄	キタカ ヨシオ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・物性物理学領域・教授	物性物理学理学博士	物質科学教育推進、アドバイザーボード、統括会議メンバー
久保 孝史	クボ タカシ		大学院理学研究科・化学専攻・教授	構造有機化学・博士(理学)	物質科学教育推進、教務・教育システム実践、運営委員
小林 研介	コバヤシ ケンスケ		大学院理学研究科・物理学専攻・教授	量子物性・博士(理学)	物質科学教育推進、広報・リクルート
今野 巧	コノ タクミ		大学院理学研究科・化学専攻・教授	錯体化学・理学博士	物質科学教育推進、キャリアパス支援
酒井 朗	サカイ アキラ		大学院基礎工学研究科・システム創成専攻・電子光科学専攻・教授	半導体物性工学・博士(工学)	物質科学教育推進、学生支援
實川 浩一郎	ジツガワ コウイチロウ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・化学工学領域・教授	触媒化学・工学博士	物質科学教育推進、キャリアパス支援
清水 克哉	シミズ カツヤ		大学院基礎工学研究科・附属極限科学センター・教授	超高压物質科学・博士(理学)	物質科学教育推進、広報・リクルート
鈴木 義茂	スズキ ヨシシゲ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・物性物理学領域・教授	固体物理、スピントロニクス工学博士	物質科学教育推進、採用・評価
関山 明	セキヤマ アキラ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・物性物理学領域・教授	固体電子物性、放射光物性・博士(理学)	物質科学教育推進、学生支援、運営委員
田島 節子	タジマ セツコ		大学院理学研究科・物理学専攻・教授	物性物理学・工学博士	物質科学教育推進、教務・教育システム実践、運営委員
冨田 博一	トミタ ヒロカズ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・未来物質領域・教授	分子エレクトロニクス・博士(理学)	物質科学教育推進、学外・国際連携、運営委員
田中 良和	タナカ ヨシカズ		国立研究開発法人理化学研究所・放射光科学総合研究センター・専任研究員	X線光学博士(工学)	物質科学教育推進、学外連携
玉作 賢治	タマサカ ケンジ		国立研究開発法人理化学研究所・放射光科学総合研究センター・専任研究員	X線光学博士(工学)	物質科学教育推進、学外連携
戸部 義人	トベ ヨシト		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・未来物質領域・教授	物理有機化学・工学博士	物質科学教育推進、アドバイザーボード、統括会議メンバー

(機関名:大阪大学 類型:複合領域型(物質) プログラム名称:インタラクティブ物質科学・カデットプログラム)

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成26年度における役割)
豊田 岐聡	トヨタ ミチサト		大学院理学研究科・附属基礎理学プロジェクト研究センター・教授	質量分析学・博士(理学)	物質科学教育推進, キャリアパス支援
中澤 康浩	ナカザワ ヤスヒロ		大学院理学研究科・化学専攻・教授, (兼)構造熱科学研究センター・センター長	物性物理化学・理学博士	物質科学教育推進, 採用・評価
中野 雅由	ナカノ マサユシ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・化学工学領域・教授	理論化学, 量子化学・工学博士	物質科学教育推進, 教務・教育システム実践, 運営委員
西山 憲和	ニシヤマ ノリカズ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・化学工学領域・教授	ナノ反応工学・博士(工学)	物質科学教育推進, 広報・リクルート, 運営委員
野末 泰夫	ノノエ ヤスオ		大学院理学研究科・物理学専攻・教授	物性物理学・理学博士	物質科学教育推進, 採用・評価
萩原 政幸	ハギハラ マサユキ		大学院理学研究科・附属先端強磁場科学研究センター・教授	強磁場物性, 強磁場分光・博士(理学)	物質科学教育推進, 学外・国際連携
花咲 徳亮	ハナサキ ノリアキ		大学院理学研究科・物理学専攻・教授	物性物理学・博士(学術)	物質科学教育推進, 学生支援
浜屋 宏平	ハマヤ コウヘイ		大学院基礎工学研究科・システム創成専攻・電子光科学領域・教授	スピントロニクス(工学)	物質科学教育推進, キャリアパス支援
原田 明	ハラダ アキラ		大学院理学研究科・基礎理学プロジェクト研究センター・特任教授	高分子化学, 超分子化学・理学博士	物質科学教育推進, アドバイザリーボード, 統括会議メンバー
藤原 康文	フジハラ ヤスフミ		大学院工学研究科・マテリアル生産科学専攻・教授	電子材料学・工学博士	物質科学教育推進, 学外・国際連携, 運営委員
福井 賢一	フクイ ケンイチ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・機能物質化学領域・教授	表面物理化学・博士(理学)	物質科学教育推進, 採用・評価, 運営委員
寶迫 巖	ホウサク イワ		国立研究開発法人情報通信研究機構・未来ICT研究所 研究所長	半導体デバイス, テラヘルツ工学・理学博士	物質科学教育推進, 学外・国際連携
真島 和志	マシマ カズシ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・機能物質化学領域・教授	有機金属化学・理学博士	物質科学教育推進, 学外・国際連携, 運営委員
松本 卓也	マツモト タクヤ		大学院理学研究科・化学専攻・教授	反応物理化学・理学博士	物質科学教育推進, 広報・リクルート
南方 聖司	ミナカタ サトシ		大学院工学研究科・応用化学専攻・教授	有機合成化学・博士(工学)	物質科学教育推進, キャリアパス支援, 運営委員
宮坂 博	ミヤサカ ヒロシ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・未来物質領域・教授	物理化学, 光化学・工学博士	物質科学教育推進, 学生支援
森川 良忠	モリカワ ヨシタダ		大学院工学研究科・精密科学・応用物理学専攻・教授	量子シミュレーション・博士(理学)	物質科学教育推進, 採用・評価, 運営委員
吉田 博	ヨシダ ヒロシ		大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・未来物質領域・教授	計算機マテリアルデザイン・物理理論・博士(理学)	物質科学教育推進, 教務・教育システム実践

(機関名:大阪大学 類型:複合領域型(物質) プログラム名称:インタラクティブ物質科学・カデットプログラム)

16. プログラムの応募学生数、合格者数及び受講学生数

本学位プログラムの過去3年間のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成27年度は提出日現在))

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度 *(今後の募集予定: 有・無)	
プログラム募集定員数(実数)	-	20人	20人	20人	
① 応募学生数		39人	29人	28人	
	うち留学生数	-	2人	-	3人
	うち自大学出身者数	-	35人(2人)	27人(1人)	21人(2人)
	うち他大学出身者数	-	4人(0人)	2人(0人)	7人(0人)
	うち社会人学生数	-	-	-	-
うち女性数	-	2人(0人)	1人(0人)	2人(0人)	
② 合格者数		24人	22人	20人	
	うち留学生数	-	-	-	3人
	うち自大学出身者数	-	22人(1人)	21人(1人)	16人(2人)
	うち他大学出身者数	-	2人(0人)	1人(0人)	4人(0人)
	うち社会人学生数	-	-	-	-
うち女性数	-	1人(0人)	1人(0人)	2人(0人)	
③ ②のうち受講学生数		23人	22人	20人	
	うち留学生数	-	1人	-	3人
	うち自大学出身者数	-	21人(1人)	21人(0人)	16人(2人)
	うち他大学出身者数	-	2人(0人)	1人(0人)	4人(0人)
	うち社会人学生数	-	-	-	-
うち女性数	-	1人(1人)	1人(0人)	2人(0人)	
プログラム合格倍率(①応募学生数/②合格者数)(小数点第二位を四捨五入)	0.0倍	1.6倍	1.3倍	1.4倍	
充足率(合格者数/募集定員)	0.00%	120.0%	110.0%	100.0%	

※うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()には留学生数を内数で記入してください。

※平成27年度*(今後の募集予定:有・無)については、平成27年度内に受講を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。また、有の場合は、プログラム募集定員数(実数)欄には募集予定人数を含めず、下記備考欄へ募集時期とともに記載してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。

17. 学位プログラムの受講学生数・修了(予定)者数
各年度における本学位プログラムの受講学生数を記入してください。

①区分制及び一貫制博士課程

(各年度3月31日現在(ただし平成27年度は提出日現在))

学位プログラムの受講学生数等	平成24年度						平成25年度						平成26年度						平成27年度						平成28年度	平成29年度
	M1(D1)	M2(D2)	D1(D3)	D2(D4)	D3(D5)	計	M1(D1)	M2(D2)	D1(D3)	D2(D4)	D3(D5)	計	M1(D1)	M2(D2)	D1(D3)	D2(D4)	D3(D5)	計	M1(D1)	M2(D2)	D1(D3)	D2(D4)	D3(D5)	計		
平成24年度選抜																										
うち留学生数																										
うち自大学出身者数																										
うち他大学出身者数																										
うち社会人学生数																										
うち女性数																										
平成25年度選抜							18	5	-	-	-	23	-	18	5	-	-	23	-	-	18	5	-	23		
うち留学生数							1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1		
うち自大学出身者数							17	4	0	0	0	21	0	17	4	0	0	21	0	0	17	4	0	21		
うち他大学出身者数							1	1	0	0	0	2	0	1	1	0	0	2	0	0	1	1	0	2		
うち社会人学生数							0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
うち女性数							0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1		
平成26年度選抜													20	2	-	-	-	22	-	19	2	-	-	21		
うち留学生数													0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
うち自大学出身者数													19	2	0	0	0	21	0	18	2	0	0	20		
うち他大学出身者数													1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1		
うち社会人学生数													0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
うち女性数													1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1		
平成27年度選抜																			15	5	-	-	-	20		
うち留学生数																			3	0	0	0	0	3		
うち自大学出身者数																			13	3	0	0	0	16		
うち他大学出身者数																			2	2	0	0	0	4		
うち社会人学生数																			0	0	0	0	0	0		
うち女性数																			1	1	0	0	0	2		
計	-	-	-	-	-	-	18	5	0	0	0	23	20	20	5	0	0	45	15	24	20	5	0	64		
修了者数	0						0						0						5	20						
就職者数	0						0						0													
プログラム対象学生以外で、プログラムのカリキュラムの一部を受講している学生数	0						22						29						21							

※「16. プログラムの応募学生数、合格者数及び受講学生数」と整合性を取ってください。

※「修了者数」の平成27、28、29年度については、修了予定者数を記入してください。

※就職者にはプログラムを修了後に就職した者(起業した者も含む)のみをカウントしてください。

※辞退者(Q.E.によるものも含む)がいる場合は、年度毎の内訳およびその理由を備考欄に記入してください。

17. 学位プログラムの受講学生数・修了(予定)者数

各年度における本学位プログラムの受講学生数を記入してください。

②医・歯・薬・獣医学の4年制博士課程

(各年度3月31日現在(ただし平成27年度は提出日現在))

学位プログラムの受講学生数等	平成24年度					平成25年度					平成26年度					平成27年度					平成28年度	平成29年度
	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計		
平成24年度選抜					-					-					-					-		
うち留学生数					-					-					-					-		
うち自大学出身者数					-					-					-					-		
うち他大学出身者数					-					-					-					-		
うち社会人学生数					-					-					-					-		
うち女性数					-					-					-					-		
平成25年度選抜					0					0					0					0		
うち留学生数					0					0					0					0		
うち自大学出身者数					0					0					0					0		
うち他大学出身者数					0					0					0					0		
うち社会人学生数					0					0					0					0		
うち女性数					0					0					0					0		
平成26年度選抜					0					0					0					0		
うち留学生数					0					0					0					0		
うち自大学出身者数					0					0					0					0		
うち他大学出身者数					0					0					0					0		
うち社会人学生数					0					0					0					0		
うち女性数					0					0					0					0		
平成27年度選抜					0					0					0					0		
うち留学生数					0					0					0					0		
うち自大学出身者数					0					0					0					0		
うち他大学出身者数					0					0					0					0		
うち社会人学生数					0					0					0					0		
うち女性数					0					0					0					0		
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
修了者数																						
就職者数																						
プログラム対象学生以外で、プログラムのカリキュラムの一部を受講している学生数																						

※「16. プログラムの応募学生数、合格者数及び受講学生数」と整合性を取ってください。

※「修了者数」の平成27、28、29年度については、修了予定者数を記入してください。

※就職者にはプログラムを修了後に就職した者(起業した者も含む)のみをカウントしてください。

※辞退者(Q.E.によるものも含む)がいる場合は、年度毎の内訳およびその理由を備考欄に記入してください。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】人類社会の発展の歴史には、木草、皮革、金銀鉄などの天然に存在する物質・材料を如何なる目的に利用するかといった物質・材料の加工法・利用法の発展、さらにはプラスチックや高純度シリコンといった新物質・材料の開発が大きく関わってきた。20世紀後半から21世紀初頭にかけて、我が国の成長を支えた1つが、物質科学を基盤とするエレクトロニクス・自動車などの「ものづくり産業」である。このような歴史が教えるとおり、物質科学は今後も人類社会の発展的継続のために必要不可欠な学問分野である。物質科学が人類社会の発展的継続に資するためには、その時代々々に応じた産業構造や社会構造の転換にマッチした、さらには時代を先取りした新機能物質・材料、新物理現象、新測定手法、新合成プロセスの創成を推進し、これを現産業強化と新産業創成へとつなげることが求められている。そのために、本プログラムでは、プログラム履修生を物質科学研究・事業における幹部候補生(Materials Science Cadet)と位置付け、化学・物理・物質合成・機能創成・物性評価・理論解析など物質科学の様々な領域・手法を専門とするプログラム担当者が協働し、今後も我が国の国際(産業)競争力の根幹である物質科学研究・事業の将来に中核的な役割を担う人材を産学官といった幅広いセクターに輩出することを目指す。

【特色】本プログラムでは、「インタラクティブ(interactive)」という語に包含される対話性・双方向性による相乗効果の概念を、物質科学教育・研究における様々な観点、すなわち①対象物質(物質内や異なる物質間の相互作用・相関現象)、②研究手法(異なる研究分野・研究手法の双方向的な研究の推進)、③人材育成(学生間、学生-教員間、教員間、学生-学外研究者・技術者間など対話による切磋琢磨の重視)に適用し、これを基本コンセプトとする。これらの様々なインタラクティブな現象・活動を有機的につなげるために、「複数教員制」、「研究室ローテーション」、「リベラルアーツ科目」、「キャリアアップ科目」、「企業インターンシップ」、「海外研修」などの複合的なカリキュラムを導入することにより、物質科学の或る研究領域において「高度な専門性」を持つ人材の養成を前提として、それに加えて以下の能力を有する博士人材の育成を図る。

- (1) 自分の主専門とは異なる研究手法、研究領域に対する興味を持ち、「ものづくりと評価解析」、「理論と評価解析」などの複数の実践を伴う知識に立脚した「複眼的思考」さらには「俯瞰的視点」
- (2) 他の専門領域の研究者と互いの専門領域をベースとして議論ができる「コミュニケーション力」
- (3) 自ら課題を見出し、その解決に立ち向かう「企画力」、「自立性」
- (4) 既存の考え方に捉われない「セレンディピティ」的な視点および思考力
- (5) 時代とともに変わりゆく社会の動向と求めるニーズに応えられる「柔軟性」
- (6) 世界を相手に自らの考えを認めさせることができる「国際突破力」

これらの能力を習得したプログラム修了生が実際にリーダーとなって活躍が期待される10~20年後にどのような課題が待ち受けていようと柔軟に対応し、それを自ら持つ能力を駆使して解決でき、または早い時期から将来どのようなことが課題となるかを見極め、自ら新たな物質科学研究・事業のトレンドを生み出せるような人材を養成することを目的とする。

【優位性】本プログラムは本学基礎工学・理学・工学研究科が連携して新たに設置する「物質科学に関する5年一貫制博士課程プログラム」である。これらの研究科では、学界のみならず広く社会・企業で活躍する人材を育成するという基本精神のもと、積極的・継続的に大学院教育プログラムの改革を推進してきた。例えば、「科学と技術の融合」を目指して半世紀前に設立された基礎工学研究科自体もその一つである。本申請類型に関連する物質・材料科学研究においては、超伝導物質・重い電子系物質・種々の磁性体・半導体・クラスター物質・超分子・有機伝導物質等の多彩な機能性物質の創成を継続し、また物質評価・計測系研究では核磁気共鳴・表面界面分析・先端光技術・質量分析・超高压・超強磁場等の手段を駆使して、物質における新規な物理・化学現象の開拓・解明を推進してきた。各研究グループは何れも世界トップクラスの成果を出しており、大学院生もグローバル性を意識して日々修学できる理想的な環境にある。このような環境を最大限に生かし、本プログラムではさらに、物質科学の幅広い研究領域から参画するプログラム担当者・履修生のインタラクティブな横のつながりを強化していくことにより大学院教育の新たな方向性を提示し、大学院改革の一歩とする。

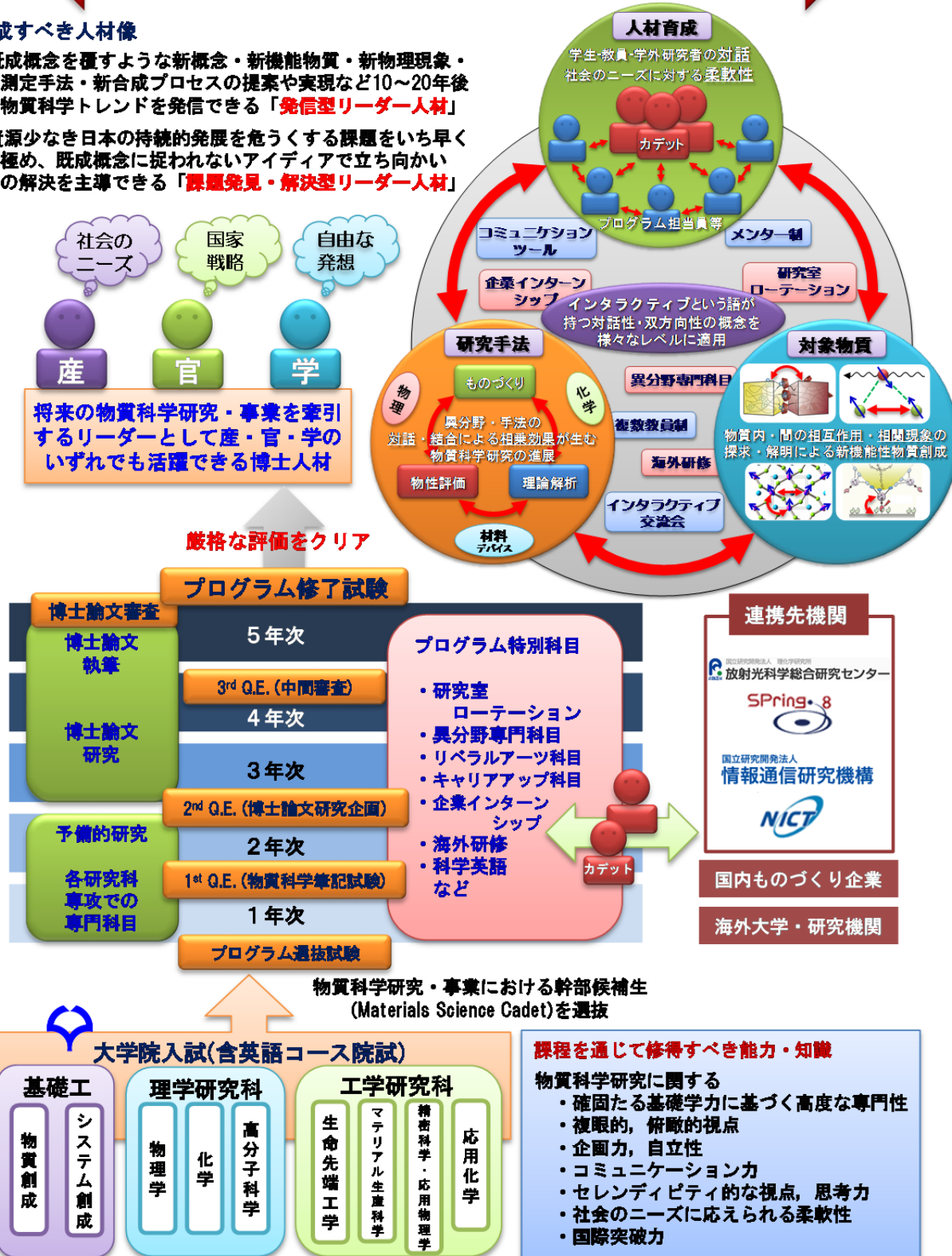
学位プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、学位プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

インタラクティブ物質科学・カデットプログラム

養成すべき人材像

- ・ 既成概念を覆すような新概念・新機能物質・新物理現象・新測定手法・新合成プロセスの提案や実現など10~20年後の物質科学トレンドを発信できる「**発信型リーダー人材**」
- ・ 資源少ない日本の持続的発展を危うくする課題をいち早く見極め、既成概念に捉われないアイデアで立ち向かいその解決を主導できる「**課題発見・解決型リーダー人材**」



「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価結果

機関名	大阪大学	整理番号	J02
プログラム名称	インタラクティブ物質科学・カデットプログラム		
プログラム責任者	河原 源太	プログラム コーディネーター	木村 剛

◇博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価（公表用）

【総括評価】

計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

リーダーを養成する学位プログラムの確立については、物質科学研究・事業における幹部候補生を養成することを目的としてカリキュラムを明確に設定しており、カデットコア科目・異分野専門科目のコースワークと、研究室ローテーション・インターンシップ・海外研修による教育が順調に行われていると評価できる。「インタラクティブ」をキーワードにして、対話性・双方向性による相乗効果の概念を、物質科学における教育と研究の中で実践している。学生の満足度・負担・到達度を把握しながら、基礎工学研究科・理学研究科・工学研究科の9専攻が密接に連携してプログラムに取り組んでおり、順調に事業運営を進めていると評価できる。

産学官民参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長および活躍の実現性については、アドバイザー企業・協力企業のリーダーや企業出身の教員による特別講義、カデットバル（講話・懇談会）及び必修のインターンシップ・海外研修により、確かな基礎力とともに広い視野をもつグローバルリーダーが育つことが期待される。キャリアパス教育と支援の体制が整備されており、プログラムの年次進行とともに産業界を志望する学生が増えるなど、多様なセクターで活躍する幹部候補生の養成を目的とする本プログラムの成果が出てきている。

グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備については、英語教育担当特任教員や、入門科目とメンターを担当する若手特任教員を本プログラムで雇用し、学生のレベルを把握した実効性のある英語教育や異分野科目教育に加え、学生に対するきめ細かい支援を行っており、プログラム担当教員とともに「協働・対話して、皆で育てる」という組織的な支援体制が構築されていると評価できる。協定大学等への海外派遣、国際会議の開催等の国際ネットワーク作りが進められているが、今後はさらに高い国際突破力や国際性を身につけるための工夫が望まれる。

優秀な学生の獲得については、明確なアドミッションポリシーと選考基準・方法を整備しており、プログラムの趣旨を理解した、意欲のある優秀な学生を確保している。今後は他大学出身者、留学生、女性の割合を増やして、多様な学生を確保することが望まれる。

世界に通用する確かな学位の質保証システムについては、研究科の修了要件・学位審査基準に基づく審査に加え、本プログラムが課す3段階の **Qualifying Examination (QE)** と **Final Examination (FE)** を行うことによってプログラム修了を認める審査体制となっており、従来の学位の質とグローバルリーダーの資質能力の両方を保証する仕組みが構築されている。QE および学位審査は企業アドバイザー委員や外部評価委員も参加すると

いう開かれた体制になっており、評価できる。

事業の定着・発展については、「大阪大学未来戦略機構」を設け、大学全体として機動的なマネジメントを行うとともに、リーディングプログラムを大学院教育改革のモデルとして全学に拡大していくという計画を検討している。本プログラムに対する学内外の評価に基づいて、支援期間終了後におけるカリキュラムの定着・発展に向けた具体的な検討が進められていることは評価できる。